各々の活動についてお話下さい。

クレイ・ロックフェラー(Monohasset Mill; The Steel Yard)



3人のアーティストと共同で、プロビデンス[アメリカ、ロードアイランド州の州都]のヴァレー地区にある旧モノハセット製造所の購入を実現しました。道路を挟んだ製造所群はショッピングセンターになったのですが、わたしたちは再建に対する代替モデルを推し進め、コミュニティーが中心となった、購入や維持に無理のない取り組みをして、アーティストの居住・作業スペースを生みだしました。(www.millproject.org) また、ザ・スティール・ヤードというNPO (www.thesteelyard.org) も立ち上げました。モノハセットの敷地に隣接する再生された製鉄作業所で、文化芸術表現や職業訓練や小規模のビジネス・インキュベーションの機会を増やすため考案された、アートと技術訓練プログラムを提供しています。

吉澤弥生 (recip)

クレイが書いたザ・スティール・ヤードの説明を興味深く読ませていただきました。 <www.recip.jp>2004年に発足したrecipも、職業訓練よりは日常の中での実践に近い ものですが、共通する使命を持っています。わたしたちの活動は、プロジェクト、情報、 研究開発の三つの部門に分けられます。

プロジェクト部門は、インディペンデントな活動と地域の行政や産業と提携した文化事業の双方にわたる立案、プロジェクトの運営を行っています。情報部門では、地域文化の再生を目的とする情報誌を出版し、研究開発部門は、現代の社会文化に見出される諸問題に取り組んでいます。

活動の詳細:文化情報を扱うケーブルテレビ番組 (コネクタTV) の企画制作 (大阪市の振興課との共同で、ジェイコム関西のケーブル・ウェストが運営するコミュニティ・チャンネルにて放映) 文化情報ウェブサイトの企画制作 (log osaka webmagazine <www.log-osaka.jp>)

「NAMURA ART MEETING '04-'34」のvol.00、01の記録プロジェクト。これを機に recipは、研究者、デザイナー、プログラマー、社会人、学生を擁するプロジェクト・スキャナー・プログラム (psp) を立ち上げ、多岐にわたる文化活動がどのように動き始めるのかといった視点で記録、研究、報告を行っている。

フリオ・カストロ (Tercerunquinto)

テルセルンキントは、1996年にNuevo León州立自治大学のヴィジュアル・アート校で発足し、1998年よりフリオ・カストロ、ガブリエル・カザレス、ロランド・フロレスの三人が常任メンバーとなっています。この体制のもと、私的公的スペース両方に作品を差し込む/書き込むような活動を展開してきました。わたしたちのプロジェクトは、公私というカテゴリーの境界を問うだけではなく、そのしくみを支えるすべての要素をばらばらにし、個々の要素が結ぶ関係の論理的な秩序を解体するものです。また、建築物や都市といったシステムを備えた構造体を囲む境界線について議論し、それぞれのシステムが個人、社会、文化、政治といった観点でどのような意味や影響力を持つのか調査しています。

Bf15+Pared[壁](1999)では、ギャラリーを隣の地所から隔てている壁を、敷地の区画線を越えて歩道と車道まで侵入してゆくように引き延ばしました。Casas-Habitación [住居 =居住](2000-2002)は、簡単な作品制作による介入を連ねたものです。主な動機は、家の内側の空間と関係する様々な概念の中で、隣人、共存、所有といったものを吟味することにありましたが、作品が書き込まれる社会的次元においても考察を行いました。

Escultura pública en la periferia urbana de Monterrey[モンテレー市周縁の公的彫刻] (2003-2005)では、モンテレー[Nuevo León州の州都]周辺部に位置するスクワッターたちの拠点に、50メートル四方のコンクリートのスラブ[建築用語でコンクリートを地面に流しただけの土台]を築きました。この手の地域では、道路の舗装から住居のコンクリートの床に至るまで、あらゆる公共サービスを欠いているのですが、この挿入建築は、違和感を起こさせる要素として建てられ、その空間で足りないもの求められているものの存在を際だたせました。そして集団での利用を促し、一般参加者の動力を生むことになりました。





共同制作の過程と評価について話し合ってください。

クレイ・ロックフェラー

共同制作は、個人がその能力の容量を超えて動けるように助力と活力と手段を与えます。共同制作からよい成果を得るには、まず個人としての限界を理解し受け容れることが必要だと思っています。わたしは若いとき、伝統的な学校教育の中で自分の弱点に直面させられました。三年生を二回やったのですが、これが恐ろしく辛い経験であった一方で、わたしという人間の限界をよく理解したことは、とても大事な財産になったとも考えています。段階的な学習プロセスでしたが、今やいつ助けを求めなければならないのか判断できるわけですから。

そうは言っても、わたしは仕事における協力の真価を知る国に住んでいるとは思っていません。アメリカ軍のスローガンは「軍隊は一体」ですが、わたしたちはもっとましなやり方ができ、より高い評価をうけることも可能なのですから。すべてを一つに包み込む共同制作と並んで、思想と背景の多様性を維持することは不可欠です。

問いかけは成否を分けるもう一つの材料ですが、昨日友人と共同制作のツールについて話していて、耳を傾けることの必要性を思い出させられました。もし周りで起こっていることに耳を澄ましていないなら、何を問いかければいいかもわからないでしょう。それに何より、誰も聞きやしないと思っている状況において気持ちよく問いかけていくことなんて、できませんものね。

弥生はレシップが日常実践としてのアートに重点を置いていると言いました。ザ・スティール・ヤードも、まず何より人々を創造的なプロセスに巻き込み、個々人が自分の中に潜在する創造性を探求し、雇用機会を広げる応用技能を得る手段となりたいと思っています。わたしたちは機材設備、コース履修計画、インストラクター、教育哲学を提供しますが、修了時に何を持って出てゆくかは参加者しだいです。授業を終えた人には、可能性と能力いずれの面でもなしうることが広がったという感覚を手にしていて欲しいですね。それぞれの職業領域内のことでも、個人の創造性といった点でもよいのですが。

わたしたちは大抵、自分の個人としての可能性や能力がきっかりここまでだと思えるような地点に立つと、それ以上先に行こうとしません。限られた選択肢を与えられた結果そうなってしまったのです。アメリカ市民にとって、選択肢の多くは社会経済的な階層によって宿命づけられているように思えます。教育制度においてやり尽くされているようにね。こと知識や潜在性、達成できる事柄に関するかぎり、若い人たちには「これで十分」なんてことを受け容れたりそれで足れりとしないように教育しなくては。どんなシステムが次に開発されるにせよ、あなたが言ったように、日常実践としての創造性や想像力がその中心に据えられねばなりませんね。

吉澤弥生

地域文化と情報の生産消費に関するオルタナティブなシステムが必要だとますます感じています。官の主導でも民の利益でもなく、地域の人々によって求められ、探求され、話し合われ、開発されるシステムです。私たちはそういったシステムを大阪(大阪中心主義ではありませんが)で開発したいと思いrecipを組織しました。

クレイ、あなたの言う「潜在する創造性」と「雇用の機会」はわたしたちにとっても大事なことなんです。 なので、個人が発展してゆくために必要なプロセスと可能性を盛り込んだ地域のメディアとプロジェクトを制作していきたいのです。

フリオ、あなたの社会的、そしてモノへの関心はわたしたちにも共通すると思うのですが。

フリオ・カストロ

テルセルキントにとって共同制作は、プロジェクトを実現する経験に関わるものです。他者との関係が作品の中に認められるという点でもね。私たちにとって、プロジェクトが実現されるコンテクストと関わりながらプロセスをどのように具体化していくか話し合うことが大事なのです。人々とのやりとりは、プロジェクトの発展に帰結します。

スラブのプロジェクトを利用して、プロテスタント教会のグループはコンクリートの土台を子供のためのダイニングルームにしました。そこで子供たちは、土曜でとに食事や薬品をもらい、プロテスタントの教えを受けます。また、新しい施設と都市のインフラの建設を公約に掲げる政党も、散発的にスラブを政治演説の演壇に利用していました。私たちの考えでは、誰もがスラブを利用できます。プロテスタントの教団は自分たちの教会が欲しいとスラブを用い、政党団体は票を得たいとスラブを使う。わたしたちは、それをアート・プロジェクトとみなし観察者の立場をとっていますが、同時に彼らの利用から何かを得ているわけです。別種の言語と関係がわたしたち皆の間で生みだされるのです。

内海博文 (recip)

コラボレーションという言葉は非常にシンプルですが、それが持つ意味となると様々です。わたしたちは生活し活動する地域が違うので、共同制作のかたちも異なると思われます。ですがわたしたちは、お互いの活動について見事に似通った言葉で語っています。

まず、それぞれの活動においてコラボレーションとは何か。クレイは「すべてを一つに包 み込む共同制作と並んで、思想と背景の多様性を維持すること」が不可欠だと話しました。 フリオは「人々とのやりとり」、弥生は「様々な人が参加していること」であると。みなそれを 「異質なもののネットワーク」と見なしています。文化が備える魅力とは、異種なものが混 ざり合った中でつながりを見つけることにある。そうした考えに、わたしも賛成です。

では、そういった共同作業の目的は何なのか。この点でも、わたしたちの言葉づかいは似ています。例えばクレイは、個人を「その能力の容量を超えたところへ動かす」ことを目的にし、それは「段階的な学習プロセス」で、個人に「可能性や能力の面で広がったという感覚」をもたらすことだと述べています。フリオは活動の動機として、「隣人、共存、所有という概念を吟味する」ことを挙げました。表現は異なりますが、共同作業の価値はそのプロセスにおいて生みだされる「変化」だと言えます。

最後に、この共同制作の変化をもたらすプロセスの中で「アート」とは何なのでしょう。 クレイは創造のプロセスを「個人が自分の潜在する創造性を探求するための手段」と説明しています。フリオは「皆の間で生みだされる別種の言語や関係」と述べている。言い換えると、アートとはわたしたち自身の変化を生みだすために考案されたツールのようなものなんですね。

わたしもみなさんにとても近い意見です。最近文化権についての論文を書きましたが、そのなかで、多様な経験を持つことはわたしたちの権利の一つであると主張しました。 弥生が言ったように、recipはとても若く、地域行政との関係、資金など、たくさんの問題に直面しています。そこでみなさんの活動の中で共同制作の際にどんな困難があるか話してもらいたいのですが。

クレイ・ロックフェラー

財政的な制約があること。それに簡潔かつポイントを突いた表現で私たちの使命を表現しなければならないことですね。でなければ、行政、産業、資金提供者といった他者を容易に説得できませんから。あとは、ピラミッド型の組織だてられたヒエラルキーを持たず、物事の決定がフラットに包摂型でなされる組織と作業するときですね。直接民主主義は追求するに値しますが、実現するのは大変です。

フリオ、短い間だけど、わたしは地域の離もがアクセスでき独自のやり方で使える場所を運営していたとき、そこを「中立」で「共有」されたものにしようと努めたんです。あなたたちのグループが活性化したコンクリートのスラブにも似て、わたしはその空間を、どんなものにも簡単に変えられるように、ごく基本的なものにとどめようとがんばりました。キュレーターとして振る舞うことも、何ができて何ができないか示すこともせずに。とても困難で骨が折れ、割りの悪い仕事だったけど、教育的なことこの上なしでしたよ。この経験があって、わたしは開かれ解放されアクセス可能な共同スペースとは、共同制作とコミュニティが生みだす具体的な形だと気づいたのです。

フリオ、スラブはどんな風に組織され、維持され、活性化されるものなのかしら?

共同制作の政治的な義務と成果について論じて下さい。

吉澤弥生

難しい質問ですね。特に「政治的」ときては。例えば日本ではマスメディアの影響が大きいため、わたしたちがやっているケーブルテレビ番組やウェブサイトのようなオルタナティブ・メディア、あるいはインディペンデント・メディアは、残念ながら少数なんです。オルタナティブ・メディアの制作にかかわることは、即「政治的に過激なアクティヴィスト」ということになります。とはいえ現代においては、マスメディアが流す情報を無批判に消費するという姿勢それすらも政治的なのですが、このことは必ずしも認識されていません。日本では、自分のことを「ノンポリ」と考えている人があまりに多く、人々は自らの政治的な意見やかかわりをほとんど認識していないと思います。個人的な経験は自ずと政治的なかかわりに関係してくると思うのですが、わたしはそのプロセスをほとんど経験していません。

内海博文

クレイ、あなたの「空間プロジェクト」はフリオのプロジェクト同様、地域の誰もがアクセスでき独自のやり方で使える「共有」の場であるという点で興味を引きます。運営にはかなりの労力を要し、割に合わない仕事だとあなたはいいますが、にもかかわらずその「教育的意義は計り知れない」と感じている。「Do art yourself」というテーマを掲げ、「(仮設的な理想の)アートセンター」というイメージで実施された第三回大阪カレイドスコープ(2005)と通じるところがありますね。「開かれ解放されアクセス可能な共同スペースとは、共同制作とコミュニティが生みだす具体的な形」という考えにはわたしも同意見です。共同制作におけるコミュニケーションには、具体的な物を介することが不可欠ですから。そこで「コミュニティの中の個々人がプロデューサーとなる実践に即した方法」についてお聞きしたいのですが。

フリオ・カストロ

コンクリートのステージは、それが置かれるいくつかのコンテクストとの関係で公共性を帯びるよう設計されたのですが、この場合の共同制作は、クレイがマネージメントしていたスペースでの体験と少々異なります。わたしたちは傍観者にとどまるわけですから、スラブを建ててそこを去り、何が起こったかを見に戻ったときも、空間の使用方法や活動に干渉しないようにしました。現在スラブを所有している人は、地方自治体と接触し、地域コミュニティーのスポークスマンとしての責任を引き受けています。以来、彼らはいくつかの問題提起をしており、例えば、ニヶ月前などはとうとう共同の給水器を手に入れ、法の抜け穴を利用して土地の所有権を請求できるような場所に設置してしまいました。わたしは、このような変化がスラブによって引き起こされたと考えているわけではありません。彼らはそれ以前にも、そしてその後も実に多くのことを行っていましたからね。とはいえ、集まる場所を得たことで、その人がスポークスマンになろうと決心する特殊な環境が作られたことは確かで、それは社会活動の観点からは、ある意味で「プロデューサー」になるということでしょうね。

このプロジェクトに臨む際、わたしたちは「侵入という状態に侵入する」のだと宣言しました。したがってわたしたちの場合、ダイアローグの空間や時間を創造することは、アートや特定状況に応じた社会活動に関わる実践であるにとどまらず、様々な環境を関連づけ相乗作用を生みだすことなのです。

今ちょうど、様々な文脈や地域の問題に沿った教育とダイアローグを含む一つのプロジェクトを終えたところです。学習グループのメンバーは四人で、元N55のリッケ・ルーサー&セシリア・ウェント、テンポラリー・サービスのブレット・ブルーム、そしてわたし、テルセルキントのフリオ・カストロです。わたしたちは日本、スウェーデン、ドイツ、アメリカの都市で一年以上作業を行い、ごみを活用し知恵を絞って、他の人々も再利用できる、それぞれの地域の文脈にふさわしい建築物と戦略を生みだしました。(www.learningsite.info)

プロデュースの話との関連でお話すれば、スラブのプロジェクトは市の法律を侵犯するもので、学習グループで作ったプロジェクトもまた、作ったポスターが非合法建築の建設マニュアルに近似していたため非合法なんです。けれども二つのプロジェクトの理念は法を犯すことではなく、ダイアローグなのです。

クレイ・ロックフェラー

フリオが述べたように、「地域」に対して敏感に感応できるようにしていなくてはなりません。「プロデュース」の過程をとおして、自分の地域と起こりうる変数すべてに対する意識が、ごく基本的なレベルで必要とされます。その変数は、(公私にわたり、個人と組織/システム両方のレベルで)コミュニティの局面すべてに対するあなたの介入に応じて変化し続けます。

プロダクション[制作]というものは、特定の案やプロジェクトに動機づけられているか、あるいは何かをしたり変化を生みだしたいという、はっきりした方向は定まらずとも激しく運動し続ける欲求によって動いています。後者の場合、理念や「いかに」という手段なくしては寄る辺なく感じられるもので、ひどい欲求不満に陥るかも知れません。けれどそのようなときでも、ダイアローグが持続し進化するにつれ、生みだされる物のかたちが発展すると信じなければなりません。

新しいアイディアは、ダイアローグを通して展開し明らかになります。それは求められた結果、戦略あるいはプロセスに関わる新たな問いかけも同様です。結果や産物は、それが置かれるコンテクスト-関わった人々、地域社会、環境-にとって固有にして唯一無二のものとなり、このコンテクストを熟知する人々によってのみ存在意義を決定されるのです。

フリオ・カストロ

博文が文化権について書いたものを読んで、ラテンアメリカのほとんどの国における諸 問題は、この権利に対する認識が欠けていることと関係していると思いました。文化権 が認められていないのは、貧困やら教育へのアクセスやらといった経済社会の問題の せいであり、またそれは巨大イベントによって煽動的なやり方で覆い隠されているのか も知れません。

メキシコでは大都市はさておき、教育が他の話題に向いているので、この種の基本的市 民権の欠落が意識されるには至っていません。例えばここチウダド・ファレズでは、占拠 された地域には高校が建てられていないのですが、それは国家がこの地区の住人を工 場労働者と捉えているからなんです。

わたしは博文の意見を理解し、その意味について話し合うことで問題をはっきりさせる ことができるのではと考えています。けれどもこのような考えを私の周りの人みなが持っ ているとは言いがたい。大多数の人はこれらの問題について滅多に考えたりしませんか らね。それでも文化の問題を国家の手に渡すのは危険です。そんなことをしてもわたし たちはどこにも到達しないし、全てがお役所仕事になってしまうでしょう。

内海博文

最後にrecipの活動の将来的展望についてお話しして、締めくくりとしたいと思います。 触れたことのないものに触れ、自分自身の感性の変化を経験し、何かしら新しいもの を生みだす。いいかえれば、既存のゲームの中でゴールを争い合うのではなく、異質な ものとのコミュニケーションをとおして、現在たまたまある、ときに選択の余地もないわ たしたちの現在の生を見つめ直し、生のためのオルタナティブな選択肢を開こうとする。 アートの創造や享受を通じてこうした変化を経験できる環境こそが、地域における文化 の自由だと思います。この点で、わたしたちに変化を体験する機会を与えてくれるアート NPOの存在は興味深い。NPOが個人の過剰な努力に頼る必要がなくなり、政治的資金 や経済利益から独立できるような制度を制定することが重要だと思います。そして、将 来的にはアートNPOが大阪において例外的な存在でなくなることを、わたしたちは願っ ています。 このポスターは第3回大阪・アート・カレイドスコープ
<www.doartyourself.jp>において、recipとアトピア・プロジェクト
の共同制作により実現したものです。テキストは2005年11月から12月
にかけてrecip、ザ・スティール・ヤード、テルセルンキントのメンバー
の間で行われたディスカッションをもとに作成されました。
<www.recip.jp>

2006年6月にアトピア・プロジェクト<www.atopiaprojects.org> が発行した全8枚のポスターのうちの1枚です。 写真及びテキストに関する著作権は、それぞれ寄稿していただいた作 家、アーティストに帰属します。 編集・収集に関する著作権はアトピア・プロジェクトに帰属します。 デザイン: グレアム・リンチ <www.gelo.ca>

第3回 大阪・アート・カレイドスコープ "do art yourself" 主催: 大阪府立現代美術センター
企画・運営: 大阪アートNPOコンソーシアム
NPO法人大阪アーツアポリア
應典院寺町倶楽部
特定非営利活動法人キャズ (CAS)
特定非営利活動法人ことことばとこころの部屋
NPO法人DANCE BOX
NPO法人Beyond Innocence (BRIDGE)
NPO法人とはと表現とメディアのための組織 (remo)
NPO法人は録と表現とメディアのための組織 (remo)
NPO法人は対文化に関する情報とプロジェクト (recip)
この印刷物は第3回 大阪・アート・カレイドスコープ "do art yourself"
の 開催の機会に、「大阪ポスタープロジェクト」として制作されました。

Please discuss your activities.

Clay Rockefeller (Monohasset Mill; The Steel Yard)



I worked with three other artists to purchase the old Monohasset Mill in the Valley district of Providence. The mill buildings across the street were turned into a shopping center, but we pursued an alternative model of regeneration, and created artist live/work spaces with a community-centered, affordable, and sustainable approach <www.millproject.org>. I am also a founder of The Steel Yard <www.thesteelyard.org>, a non-profit organization that provides arts and technical training programs designed to increase opportunities for cultural and artistic expression, career-oriented training, and small business incubation in a revitalized steel yard next door to the Monohasset property.

Yayoi Yoshizawa (regional culture information and projects (recip))

I read with interest Clay's description of The Steel Yard. recip <www.recip.jp> (founded 2004) has a similar mission, though not so much career-oriented training as daily practice. Our activity consists of three sections: Project, Information, and Research & Development (R&D)

The Project section draws up plans and manages projects, including both independent actions and cultural programs with local governments and businesses. The Information section publishes an information magazine aiming at revitalizing local cultures. The R&D section approaches problems in contemporary society and cultures.

Activities include:

Designing and producing a cable TV program (ConnectorTV) on cultural information (in conjunction with Osaka City Promotion Association; broadcast over the community channel of Cable West, J:Com Kansai).

Designing and producing a cultural information website (log osaka web magazine <www.log-osaka.jp>).

Documenting projects in the Namura Art Meeting '04-'34, vol.00 and vol.01. From this opportunity, recip established the Project Scanner Program [psp], which consists of researchers, designers, programmers, working people, and students. This unit executes documentation, research, and reporting on how various cultural movements came into operation.

Julio Castro (Tercerunquinto)

Tercerunquinto started in 1996 at the Visual Arts School of Universidad Autónoma de Nuevo León. Since 1998, the group has had three permanent members: Julio Castro, Gabriel Cázares, and Rolando Flores. Under this scheme Tercerunquinto has developed works that insert themselves in both private and public spaces; the projects not only question the very limits of these categories, but also disarticulate all of the elements that support these systems, and dismantle the logical order of their relations.

Tercerunquinto also seeks to discuss the boundaries that surround the constitution of any system—architectonic or urban—and explore its personal, social, cultural, or political implications and effects.

In Bf15+Pared (1999), the wall that divided the gallery from the neighbor's property was extended beyond the property's limits, invading both sidewalk and street.

Casas-Habitación (2000–2002) is a series of interventions of simple execution, in which the main motivation is to explore concepts of neighborhood, coexistence, and property, among other concepts that relate to the domestic space, while thinking in the social dimension in which the piece is inscribed.

In Escultura pública en la periferia urbana de Monterrey (2003-2005), we built a fifty square meters concrete slab in the outskirts of Monterrey, at a place occupied by squatters. Such areas usually lack any kind of public services, street paving, or even concrete floors in the homes. This architectonic insertion erected itself as a foreign element that highlighted the shortcomings and needs of the space, and generated a participatory dynamic through encouraging collective appropriation.





Discuss the process and value of collaboration.

Clay Rockefeller

Collaboration facilitates, energizes, and enables individuals to move beyond their own capacity. In order to effectively collaborate, I believe it is first necessary to understand and accept one's limitations as an individual. At an early age, I was forced to face my weaknesses within traditional schooling. I repeated third grade, and while this was an incredibly painful experience, I think that having an intimate understanding of my personal limitations has become one of my greatest assets. It was a gradual learning process, but I now know when I need to look to others for assistance.

However, with that said, I do not believe that I live in a country that truly values collaboration. The slogan of the US army is "An Army of One"; we can do better and deserve better. It is necessary to maintain diversity of thought and background with inclusive collaboration.

Questions are another critical ingredient. Yesterday I was speaking to a friend about the tools of collaboration, and he reminded me about the need to listen. One will not know what questions to ask if one does not listen to what is going on around them; furthermore, one will not feel comfortable asking questions in the first place if they think that nobody is going to listen.

Yayoi mentioned that recip focuses on arts as a daily practice. The Steel Yard's desire is to engage people first and foremost in the creative process, and for that to be a vehicle for individuals to explore their creative potential or gain applicable skills that could expand their employment opportunities. We provide the facilities, course curriculum, instructors, and teaching philosophy, but it is up to the participant as to what they walk out with at the end of the program. Hopefully when the class ends they have an expanded sense of what is possible and what they could be capable of, within their professional field or as a creative individual.

All too often we get to a point at which we think we know exactly what is possible or what we are capable of as individuals and stop pushing ourselves further. This is a result of being presented with limited options, most of which seem to be predetermined for the citizens of the US by the socioeconomic class strata as it plays out in our educational systems. We should be teaching the youth not to accept or settle with "enough" when it comes to knowledge, potential, and what they are capable of achieving. A focus on creativity and imagining, as a daily practice, should, as you say, be central to whatever system is developed next.

Yayoi Yoshizawa

We increasingly feel the need for alternative systems for the production and consumption of regional culture and information. These are not public initiatives or private interests, but systems that are needed, explored, discussed, and developed by regional people. We wanted to develop these systems in Osaka (not Osaka-centrism), and formed recip.

Clay, your phrases, "creative potential" and "employment opportunities" are also important for us. We would like to produce regional media and projects that in different ways include the processes and possibilities necessary for individuals to develop.

Julio, I think we share your social and material interests.

Julio Castro

For Tercerunquinto, collaboration is about the experience of realizing our projects and the way in which relationships with other people are present in the work. For us, it is important to discuss the materialization of process in relation to the contexts in which the projects are realized. Interaction with people comes as a consequence of developing the projects.

With the concrete slab project, an evangelical church group used the slab as a dining-room for children; every Saturday they had food, medicines, and evangelic messages. A political party sporadically used the slab as a platform from which to make proselytizing speeches; they promised the construction of new institutions and urban infrastructure in exchange for votes. Our thinking is that everyone is taking advantage of the slab. The evangelical group wants a church so they use the slab, and the political party wants votes so uses the slab. For us it is an art project and we take the position of observers but at the same time we are also taking something from that. So there is another kind of language and relationship created between all of us.

Hirofumi Utsumi (recip)

The word collaboration is very simple, but it has a huge variety of meanings. All of us live and act in different local places, so the forms of collaboration with others are also different. But we each use marvelously similar words to express our activities.

Firstly, what is collaboration in our activities? Clay describes it as the need to "maintain diversity of thought and background with inclusive collaboration," Julio describes collaboration as "interactions with people," and Yayoi describes collaboration as "composed of a variety of people." All of us describe collaboration as a network of otherness. I also strongly agree that the charm of culture is in the connections within heterogeneity.

Secondly, what is the aim of such collaboration? In this point too, we use similar terms. For example, Clay said the aim is for individuals to "move beyond their own capacity," that it is a "gradual learning process," and it brings for individuals "an expanded sense of what is possible and what they could be capable of." Julio described the motivation to "explore concepts of neighborhood, coexistence, and property." Stated differently, the value of collaboration is in the "change" produced in the collaborative process.

Thirdly, what is "art" in this collaborative or changing process? Clay described the creative process as "a vehicle for individuals to explore their creative potential," and Julio talked of "another kind of language and relation between all of us." In other words, art is a sort of tool designed for producing our own changes.

I share a very close opinion with all of you. I wrote a paper on cultural rights in which I insisted that a diversity of experience is one of our rights.

As Yayoi said, recip is very new. We face a lot of difficulties: our relationship with the local government, money, and so on. What are the difficulties involved in collaboration within your activities?

Clay Rockefeller

Difficulties include financial limitations and the need to simply, accurately, and succinctly articulate our mission so that it is easily digestible by others (government, business, funders, etc). Another difficulty is trying to work in an organization where the decision-making is horizontal and inclusionary, rather than having a pyramidal organizational hierarchy. Participatory democracy is worth pursuing, but it is a hell of a thing to achieve.

Julio, for a short period of time I ran a space that I tried to keep "neutral" or "common," where anyone from the community could access and use the space as their own.

Similarly to the concrete stage that your group facilitated, I did my best to keep the space very basic so that it could easily be transformed. I did not act as a curator of the space, and I did not say what could or could not happen. It was a fairly difficult, laborious, and thankless task, but endlessly educational. This experience helped me to realize that open, free, common, accessible space is the physical embodiment of collaboration and community.

Julio, how is the concrete stage organized, maintained, or facilitated?

Discuss the political imperatives or outcomes of collaboration.

Yayoi Yoshizawa

This is a difficult question, especially regarding the "political." For example, in Japan the influence of mass media is so strong that alternative media or indymedia—such as our cable TV programs or website—is regrettably minor. To be connected with the production of alternative media immediately equates with: "They are politically radical activists." However, at this time, the posture that one is non-critically consuming information through mass media is itself political. But this is not necessarily recognized. In Japan, where so many people think of themselves as "non-political," I think it is scarce for people to recognize their own political intentions or implications. So, I think the individual experience necessarily relates to the political implication, but I hardly experience this process.

Hirofumi Utsumi

Clay, your "space project" is, like Julio's project, interesting as a "common" place where anyone from the community could use the space as their "own." You also said it was a fairly laborious and thankless task. Nevertheless, you felt it was "endlessly educational." This project is rather like the third Osaka Kaleidoscope (2005); the theme is "do art yourself" and the image is "(temporary and ideal) art center." I agree that "open, free, common, accessible space is the physical embodiment of collaboration and community." Materiality is indispensable for our collaborative communication. I would like to know the "practical ways in which individuals in communities can become producers."

Julio Castro

Clay, the concrete slab was a space designed to be public in relation to several contextual circumstances. To work with people in this case was a little bit different from your experience with the space you managed, because we remain as observers. We built it and went away, and return to see what has happened, to avoid interfering with the uses and the activities of the space. Now, the man who owns the slab is in contact with the municipality and has the responsibility of being spokesman of the community. They have since raised several issues. For instance, two months ago they finally got a common water dispenser and this put them in a position where they can use a legal loophole to ask for the ownership of the land. But I don't like to think that the slab caused this change, because they did many things before and after we met them. But a space of gathering made a special circumstance from which he decided to become a spokesman, and in a way a "producer" in terms of social activities.

When we made this project we declared that it was to "invade a state of invasion." Therefore, in our case, it is not only the practices related to art or the social activities of the particular situation, but also the synergy of relating different circumstances to create space and time for dialog.

I have just finished a project that involves education and dialog according to different contextual and local issues. Learning Group includes four people: Rikke Luther & Cecilia Wendt, formerly of N55; Brett Bloom, from Temporary Services; and me, Julio Castro from Tercerunquinto. For over a year we worked in cities in Japan, Sweden, Germany, and US, using garbage and knowledge to make constructions and strategies that can be reproduced by other people and applied within their own local contexts.

In relation to the issue of producing, I can tell you that the concrete slab project was illegal under city laws. And the project I made with Learning Group is also illegal, since the posters are like a manual to make illegal constructions. But the idea in both of them is not about transgression, it is about dialog.

Clay Rockefeller

As Julio mentioned, it is necessary to be sensitive and acutely aware of the "local." At a very basic level it is necessary to be aware of your terrain and all possible variables throughout the process of "producing." These variables are constantly changing depending on your interactions with all spheres of the community (public and private as well as individual or organization/system).

Production can be motivated by a specific idea or project, or can be a semi-directionless, but simultaneously intense and restless, desire to do something or create change. In the case of the latter, it can be incredibly frustrating because without the idea or the "how" one can feel helpless, but in such cases one must trust that the form of the product will develop as the dialogue continues and evolves.

Through dialogue, new ideas evolve and reveal themselves, as well as new questions regarding the desired outcome and the strategy or process. The desired outcome or product is unique and specific to the surrounding context—the individuals involved, the community, and the environment—and can only be identified by those with an intimate knowledge and understanding of their context.

Julio Castro

Regarding Hirofumi's essay on cultural rights, I can relate the issues to the lack of knowledge of these rights in almost all of Latin America due to economical and social problems (such as poverty and access to education). These rights can also be masked in a demagogical way through massive events.

In Mexico, apart from the major cities, the lack of these types of basic civic rights is implicit in the way that education is directed at other topics. For instance, here in Ciudad Juarez a high school can't be built in an occupied area because the state profiles those people as factory workers.

I understand the sense of the essay, and to discuss the meaning of it is a good way to put it in perspective. But I can't say that these ideas are shared by the people who surround me, because the majority of people seldom think about these issues. And I consider it a risk to leave cultural issues in the hands of the state because that will lead us nowhere and everything will have the character of officialdom.

Hirofumi Utsui

I would like to conclude by describing recip's view of the future of our activities: to meet something unfamiliar, to undergo a change in my own sensibility, to produce something new. In other words, not to contest goals in established games but to rethink our current, contingent, and often involuntary life and to open up alternative options for life through communication with otherness. The circumstance in which we can experience such change by producing and enjoying arts is a cultural liberty in local places. In this respect, art NPOs are interesting in that they give us chances to experience our own changes. It may be important to constitute an institution in which NPOs do not have to depend on the excess efforts of individuals and become independent from political grants and economic profit. In the future, we hope that art NPOs will become unexceptional beings in Osaka.

This poster was realized through a collaboration between Atopia Projects and recip < www.recip.jp>, in conjunction with The Third Osaka Art Kaleidoscope < www.doartyourself.jp>. Text realized through a discussion between representatives of recip, Tercerunquinto, and The Steel Yard, November–December 2005.

This poster is one of eight posters published by Atopia Projects <www.atopiaprojects.org> June 2006. Individual images and texts © the respective authors and artists. Editorial matter and collection © Atopia Projects. Design: Grahame Lynch <www.gelo.ca>

The Third Osaka Art Kaleidoscope "do art yourself."
Organized by Osaka Contemporary Art Center.
Coordinated by the Osaka Art NPO Consortium
Beyond Innocence (BRIDGE)
Coe to Cotoba to Cocoro no Heya (cocoroom)

Contemporary Art and Spirits (CAS)
DANCE BOX
Osaka Arts-Aporia

Osaka Arts-Aporia
Outenin Teramachi Club
record, expression and medium organization (remo)

regional culture information and projects (recip)
This publication is produced as Osaka Poster Project on the occasior
of The Third Osaka Art Kaleidoscope "do art yourself."

